



家族の支え

ある学校の6年生に貴史君という男の子がいました。6年生に進級した貴史君は、ぜひ、運動会の応援団長になりたいと思っていました。低学年の頃から強い憧れを持っていて、中学2年の姉も小学校時代に応援団長を経験していたからです。その6年生では、応援団長の選出に立候補と演説という方法を取っていました。立候補した者がみんなの前で演説を行い、最も投票が多かった人が団長になるのです。

貴史君は、考えた演説原稿を家族に見せ、相談しながら修正しました。そして、夕食後、繰り返し、家族の前で練習しました。家庭訪問の際に、おばあさんは、そのことを話し、応援団長になれるよう家族でしっかり応援したいと張り切っておられました。担任は、おばあさんの元気よさ、気合いに少々びっくりしたものの、家族ぐるみで貴史君を後押ししようとする温かい雰囲気を感じました。

しかし、残念なことに貴史君は次点となり、応援団長に選ばれませんでした。貴史君の落胆の大きさはいうまでもありません。応援団員としてもやる気を失いかけている貴史君に、姉は自分が団長として苦労したことを話し、団員の協力が大切だと伝えました。父と母は、気持ちを切り替え、副団長として、みんなをまとめ、団長を支えていくことこそが貴史君の仕事だと諭しました。

家族の支えで、貴史君は再び応援団への熱意を取り戻し、真剣に練習に取り組みました。その後の練習の中で、団長と団員が練習態度をめぐって口論することがありました。その時、貴史君は双方の気持ちを聞き、仲介をしたのです。全員で話し合いの場を持ったこともありました。みんなが素直に自分の気持ちを話したことで、わだかまりも解け、応援団としてのまとまりも高まっていきました。

貴史君は、応援団を通して大きく成長しましたが、そこには家庭の支えがありました。思いや悩みを素直に話せる家族。それを受け止めつつも、新しい視野が広がるよう誘い、支えてくれる家族。この話を聞き、改めて家庭の力の大きさを感じました。

子どもの目は、「できた」「できなかった」「うまくいった」「失敗した」など結果のみに向かいがちです。失敗をおそれて一步踏み出せない子もいます。失敗という結果だけにこだわり、それまで頑張ってきたプロセスに価値を見いだせない場合もあります。また、失敗を活かすこと、新しい視点で物事をとらえることは経験の少ない子どもにとって難しいものです。

私たちは大人がしっかりと励まし、支えていくことが大切だと思います。運動会に向け、子どもたちはよく頑張っています。しっかり話を聞いてあげてください。子ども・家庭・地域が一体となり、みんなが元気になる運動会にできたらと思います。